

幼児の捉える感情語の意味の解明 —感情語の主体に着目して— (中間報告)

東京大学大学院教育学研究科 浜名真以

The meaning of words for emotions in young children

Graduate School of Education, The University of Tokyo, HAMANA, Mai

要 約

感情語の理解や使用はコミュニケーションにおいて重要な意味を持つが、感情語を使い始めたばかりの子どもは初め大人とは違った意味で感情語を捉えており、徐々に意味が変化することが分かっている。自己と他者の感情理解を区別した研究においては、特にネガティブな感情について自己より他者を主体とした理解が先行することが示されているが、個々の感情語による違いや想定される具体的な他者についての検討はされていない。そこで本研究では、4-5歳児を対象として、幼児期の子どもが感情語ごとに想定しやすい主体を明らかにすることを目的として調査を行う。本稿では研究の目的、方法、現在の進捗状況について報告する。

【キー・ワード】 幼児, 言語発達, 感情

Abstract

Appropriate use of emotion words helps individuals smoothly communicate feelings with others. However, children who have just begun to use emotion words usually use those words differently from adults. Children need some time to be able to use emotion words the same as adults. Although previous studies have shown that children understand the negative emotions of others better than their own negative emotions, exactly which emotions and whose emotion is easy or difficult for children to understand has not been investigated in detail. The purpose of the present study is to investigate whose emotion is easy or difficult for young children to understand: their own, their friend's, or their mother's. This article reports the background and the methodology of the experiment as well as the current progress.

【Key words】 Young children, Language development, Emotion

問題

「嬉しい」、「悲しい」といった感情語は、「見る」、「聞く」といった知覚語や、「知る」、「わかる」といった認知語などとともに心的状態を表す語の1つとして検討されてきている。感情語によって、自分の状態を他者に伝え、感情の適切さについてフィードバックを受け、情動を制御する方法について聞いたり考えたりすることができるようになるため、この意味で感情語は感情理解のツールと言える(Kopp, 1989; Wellman, Harris, Banerjee, & Sinclair, 1995)。自然場面における18か月時の母親や兄弟による感情状態への言及が24か月時の子ども自身の感情語の発話頻度に関連すること(Dunn, Bretherton, & Munn, 1987)、さらに、36か月時点の母親や兄弟による感情状態への言及が6歳時点での子どもの感情理解課題成績と関連することが明らかとなっているが(Dunn, Brown, & Beardsall, 1991)、このように感情について豊富に言語入力を受けることで子どもの感情語彙や感情に関する能力が豊かになることから、感情語の使用や理解は円滑な社会生活を営む上での重要である。

子どもは20か月前後に感情語を使い始めるが(Bretherton & Beeghly, 1982)、幼児期には感情が生起するような状況に対して必ずしも適切な感情語をラベルづけできるわけではなく、状況と合致しない感情語を使用することもある(仲, 2010)。感情理解研究の文脈では、各感情に対応する状況を呈示して感情語をラベルづけさせる課題が行われ、幼児期にかけて課題の正答率が上昇することが明らかにされている。さらに、喜びは正答されやすく怒りは正答されにくいといったように感情ごとに正答率が異なることもわかっている(Widen & Russell, 2010; Wang, Lu, Zhang & Surina, 2014)。感情語による状況の呼び分けという視点で見ても、感情語を使えるようになってすぐに正確な意味範囲に対応づけるわけではなく、使用するうちに徐々に意味範囲を変化させることが示されている(浜名・針生, 2015)。

しかし、感情理解研究の多くは無人称の感情を扱ってきたという問題が指摘されている(菊池, 2006)。例えば架空のキャラクターの感情を尋ねる課題においても、子どもが回答できない場合には、「あなただったらどう感じる?」という質問を加えて回答を促すことも行われてきた(e.g., Widen & Russell, 2010; 浜名・針生, 2015)。そのような中でも自他の感情理解を比較した研究もあり、6歳児は同じネガティブな状況について自己より他者に対してネガティブな感情を想定しやすく(Karniol & Koren, 1987)、3歳児は状況から自己の感情を推測するより他者の感情を推測する方が優れることが明らかにされている(菊池, 2006)。さらに、悲しみ、怒りを喚起する状況を尋ねる場合にも自己より架空のキャラクターを主体とした方がもっともらしい回答が得られることがわかっている(Kubo, 2000)。これらの研究からは、幼児期では自己より他者を主体とした感情語の理解が先行していると考えられる。しかし、自然場面においては自分の状態を表すのに使いやすい感情語と他者の状態を表すのに使いやすい感情語が異なることが指摘されており(Fabes, Eisenberg, Hanish, & Spinrad, 2001)、すべての感情語について自己より他者を主体とした理解が先行しているのではなく、例えば、「怒る」のはお母さん、「怖い」のは自分、といったように個々の感情語によって想定しやすい主体が異なる可能性も考えられる。また、自己や他者の感情理解が論じる上でも、具体的に誰の感情であるかを明らかにしないままであることの問題も指摘されているため(近藤, 2014)、自他の区別

にとどまらず他者が具体的に誰であるかについても検討する必要があるだろう。そこで本研究では幼児が感情語ごとに誰を主体として想定しやすいかを検討することで、幼児が理解している感情語の意味をより精緻に捉えることを目的とする。

方法

参加児

4, 5歳児 29名(レンジ: 4歳9か月~6歳7か月, 平均年齢: 5歳6か月, 男児 14名, 女児 15名)が参加した。

手続き

実験者と参加者の1対1, もしくは保育士同伴のもとで行われ, 練習課題と感情課題の2フェーズから成った。練習課題では, 参加児が状況について実験者に説明することに慣れることを目的として行われた。対象児と同年齢程度で同性のキャラクターが登場する6つのイラストを1枚ずつ提示し, その状況を説明させた。その際, 実験者から感情についての言及は行わなかった。

感情課題では, 「嬉しい」「悲しい」「怒る」「怖い」「いや」「びっくり」の6つの感情語を一度聞かせた後, それぞれの感情語について, どのような状況でその感情を生起するのか, その主体が誰であるかを尋ねた。その際, 参加児本人や友達, 母親など誰が感情を生起する状況を回答してもよい旨を伝えた。感情語の呈示順はランダムであった。

現在の進捗状況

取得したデータを用いて今後分析を進める予定である。

引用文献

- Bretherton, I., & Beeghly, M. (1982). Talking about internal states: The acquisition of an explicit theory of mind. *Developmental Psychology*, 18, 906-921.
- Dunn, J., Bretherton, I., & Munn, P. (1987). Conversations about feeling states between mothers and their young children. *Developmental Psychology*, 23, 132-139.
- Dunn, J., Brown, J., & Beardsall, L. (1991). Family talk about feeling states and children's later understanding of others' emotions. *Developmental Psychology*, 27, 448-455.
- Fabes, R. A., Eisenberg, N., Hanish, L. D., & Spinrad, T. L. (2001). Preschoolers' spontaneous emotion vocabulary: Relations to likability. *Early Education and Development*, 12, 11-27.
- 浜名真以・針生悦子. (2015). 幼児期における感情語の意味範囲の発達の变化. *発達心理学研究*, 26, 46-55.

- Karniol, R., & Koren, L. (1987). How would you feel? Children's inferences regarding their own and others' affective reactions. *Cognitive Development*, 2, 271-278.
- 菊池哲平. (2006). 幼児における状況手がかりからの自己情動と他者情動の理解. *教育心理学研究*, 54, 90-100.
- 近藤龍彰. (2014). 幼児期の情動理解の発達研究における現状と課題. *神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要*, 7, 97-111.
- Kopp, C.B. (1989). Regulation of distress and negative emotions: A developmental view. *Developmental Psychology*, 25, 343-354.
- Kubo, Y. (2000). Young children's views of emotions in themselves: Preschooler's reporting about their own emotional experiences. *東洋大学社会学部紀要*, 38, 75-86.
- 仲真紀子. (2010). 子どもによるポジティブ, ネガティブな気持ちの表現: 安全, 非安全な状況にかかわる感情語の使用. *発達心理学研究*, 21, 365-374.
- Wang, Z., Lu, W., Zhang, H., & Surina, A. (2014). Free-labeling facial expressions and emotional situations in children aged 3-7 years: Developmental trajectory and a face inferiority effect. *International Journal of Behavioral Development*, 38, 487-498.
- Wellman, H. M., Harris, P. L., Banerjee, M., & Sinclair, A. (1995). Early understanding of emotion: Evidence from natural language. *Cognition & Emotion*, 9, 117-149.
- Widen, S. C. & Russell, J. A. (2010). Differentiation in preschoolers' categories for emotion. *Emotion*, 10, 651-661.